



あ

ひるさんは、なきながら学校から帰ってきて、おかあさんにもうしました。

「おかあさん、先生からいただいた月しゃのふくろをおとしたの。先生にしかられると、いや。」

この少し奇妙な書き出しに引き込まれてしまった。理由はいくつか思い当たる。子どもが学校から泣いて帰るといふ出来事が、身近にあったこと。あひるさんの言葉から引きずり出された記憶が一瞬にして多くの中に広がったこと。もう一つ、戦争をしている遠い国の反体制指導者が獄中で亡くなったこと。

小学校に上がったころ、ぼくはよく教科書や教具をなくした。何をやっても周りの子どもに後れを取ってしまう子だった。生来の性格、資質によるのかもしれないが、三月生まれで十分に発達していなかった。人の話を聞くのも苦手だったので先生の指示どおりに動けず、ぼんやりしていることが多かった。動じない図太い子に見えたかもしれないが、本人はとつてみればただ頭の中に霞がかかっているだけで、周りが別のスピードで流れているのがかなり怖かった。

時間割をしているときに、あるはずの教科書が見当たらないと押し寄せる不安に身が竦んだ。母親に言うのと、「お前がらしない(だらしがない)けんだ」と叱られて、不安はさらに膨らんだ。らしがないのは

事実だが、整理整頓など難しいことができるようになるのは、もう少し先のことなので、ただおろおろするしかなかった。

翌日は、机の中に教科書がありますように、と一心に祈って学校に向かった。机の上蓋を持ち上げてそこにしまひ忘れた教科書が見えると、パンパンに膨らんでいた不安は、一気に粉々に消えてなくなった。でも毎回ではない。暗い予感の中にして、何度ひっくり返すようにして探しても出てこないことがあった。

「ああ、わたしが月しゃのふくろやさんだったら！わたしはどんなにさいわいだったろう。わたしはこんなにしんばいしなくてもすんだのに。そして、わたしは月しゃのふくろをなくして、しんばいでしんばいではないにせいかいじゅうのことも一まいずつただであるのに！」

心配に押しつぶされそうになっているあひるは、そのままあのころのぼくだ。不安に必死に耐えている幼い心を活写した童話作家の名は、村山箒子。戦前に優れた作品を次々出すも、戦争への協力を拒み筆を断つ。昭和二十一年四十二歳の若さで亡くなった。

ある人から教わらなかつたら、この作家を一生知り得なかつた。今は押し黙るしかない人たちの声がか聞こえてきますように。

空き家 6

## 木幡智恵美

墓⑤

学生時代、共に汗を流した同期のMがこの世を去って三年になる。義母が亡くなる十日前だ。当時はコロナ禍で病室の出入りに制限があり、県外に行くことも自由でなかつた。だから、見舞いは元より、葬儀にも参列できなかつた。ようやく墓参りが叶ったのは、今年の十一月の同期会。都合がつかなかつた一人を除き、六人でお参りした。

新築の家を見せてもらったのは十数年前のことだった。「ここはお客さんに泊まってもらうところ。いつでも来んさい」と三階まで案内してもらった。奥さんが不在のため家には寄らず、直接墓に行った。家から歩いてすぐの見晴らしのいい高台に、新しい墓石が建っていた。「あいつ、死ぬ前に自分でこの墓作つたんだとよ」。Yがぼそりと呟いた。不調の原因が半年も不明で、判明した時は遅かつた。携帯電話を通して耳にした低い声が蘇ってくる。まだまだ名残のある人生に区切りを付けねばならず、自分の墓石を建てるMの思いがぐっと胸を突き、墓石の前に並ぶ同期たちの姿がぼやけた。孫の話をとろけそうな目で話していたM。奥さんや子どもや孫たちが近況報告に訪れることを待っていることだろう。

これはもう四半世紀前のこと、長岡の義妹が墓を建てた。三十歳の時、東京で一緒に暮らしていた夫である義弟を亡くした後、実家のある長岡に帰り、二人の子どもを育てた義妹。実家から少し離れたところに家を建て、ご両親や妹一家と行き来しながらその後三十年以上を過ごした。義弟は故郷の松江から遠く離れた長岡の地で眠っている。「一緒に付いて行く」と動かなくなつた義弟に泣いてすがつた義妹は、二人の愛の結晶を立派に育て、今は二人の孫にも恵まれている。義弟も、愛する奥さんと、息子に娘、その子どもたちの側で、皆を見守っていることだろう。

墓は、これから未来に行く人たちを見守り、未来に生きる人たちの心の支えになるものだ。ただ、生家の近くに建つ墓は、その未来の日々が限られてしまった。これから未来を生きる者たちの荷をなるべく軽くするために、片を付けねばならないと思うのだ。

30代フリーター トランプがウクライナ戦争の止め役を期待されて再選されるかもしれない。「欧米には『支援疲れ』が広がり、米大統領選で共和党のトランプ前大統領は『自分が大統領になればウクライナ戦争を止める』と明言しています」（元インドネシア大使・石井正文、1月20日朝日新聞朝刊）。

年金生活者 バイデンには難しい停戦をトランプならやれるかもしれないという期待があるのは、彼が強者の味方だからだ。自由競争での勝利を正義と考える共和党のイデオロギーを露骨に実行できるのがトランプだ。大国のロシアが勝ち、それにはるかに及ばないウクライナが負けるのは当然であり、強いイスラエルが国家ではないハマスを圧倒するのは当たり前と考えているはずだ。

ただし、それは彼が好戦的であることを意味しない。彼は退任演説で「私は新たな戦争を始めなかった、ここ数十年で初の大統領となったことを特別

に誇らしく思う」と自賛した。第2次世界大戦を最後に世界の戦争の本流は、破壊力を競う流血の戦争から抑止力を競う無血の戦争に転換した。彼の戦争観にはそうした世界史的な変化への認識がある。

ビジネス界出身のトランプは外交でも取引（ディール）という言葉をしきりに使った。外交の延長である戦争もディールと考え、軍事的な抑止力に加えて経済力を無血の戦争の武器とした。それで中国との経済戦争を始め

た。  
30代 トランプが再選されると、インフレが加速するとの指摘がある。中国に60%を超える関税を課す案を検討中と表明するなど保護主義を強めるとみられている。

年金 彼の基本姿勢はひと言でいえば反グローバリズムだ。それは現在の資本主義が当面する矛盾を突いており、その矛盾に振り回される有権者から広い支持を集めている。

30代 反グローバリズムというと、左

の風景になっている。

30代 上野千鶴子はこれからの日本について、人口の自然増が見込めない以上、働き手は移民に頼るしかないが、単一民族神話のもとにある日本人は多文化共生に耐えられないので、ゆっくり衰退していくしかない、と主張したことがある。「みんな平等に、緩やかに貧しくなっていけばいい」と（20

派のイメージがある。

年金 第2次産業を牽引車とした産業資本主義の時代の基本的な矛盾は資本家と労働者の対立だった。対立が生じたのは、労働者がその労働力を安く買いたたかれ続けたからだ。

第3次産業を牽引車とするポスト産業資本主義の時代に移った現在は、資本家と労働者の対立は資本主義の基本的な矛盾ではなくなった。富の稀少性の縮減が進んで、少なくとも先進国では労働者の賃金は消費支出の半分を生存の維持以外に充てることができるほど上昇した。

その結果、先進国内で安い労働力を調達できなくなった資本主義は世界中にそれを求めるようになった。主な調達は先は改革開放で資本主義化が急進展し中国であり、東西冷戦の終結で市場経済に転換した旧東側諸国だった。それが前世紀末から始まったグローバリゼーションにほかならない。

この転換は高い賃金でないと雇えない先進国の労働者の仕事を奪い始め

17年2月11日中日新聞）。

年金 現実には「多文化共生」は耐えられないどころか、気がつけば日本人にとつて身近な状態になりつつある。

もともと今の日本人の直接の祖先は「多文化共生」によって形成された。

「日本人の起源は、列島に住み着いていた縄文人に、大陸からの渡来集団が混血して弥生人となり、現代の日本人につながったとする『二重構造モデル』」が定説とされてきた」（2021年9月18日朝日新聞デジタル）。この記事は「さらに大陸からの渡来が進んだ古墳時代になって古墳人が登場したことで、現代につながる祖先集団が初めて誕生したことを示唆」する研究が進んでいることを紹介している。

「単一民族神話」が生まれたのは、むしろ「多文化共生」が当たり前すぎて、列島の住民がまるで単一民族であるかのように自然にまじり合った結果と推定することができる。「移民大国」に向かう歴史的な土壌は古くからあったと見なければならぬ。

ニュース日記 911  
中村 礼治

## トランプが問うもの

30代 トランプが訴える移民の問題は日本にとつてもよそ事ではなくなる。年金 「日本はすでに『移民大国』」という指摘がある（朝日新聞グローバル、2020年12月8日）。「経済協力開発機構（OECD）によると、3カ月以上滞在する予定で日本に来た外国人は2018年に50万人を超え、世界有数の規模となった」（同）。街を歩く外国人（外国出身者）の姿は日常